うる星○ゴら & ら○ま 1/2 CG集
うるらん2
ギャル穴ハメ放題!!

ゲーセンに入ってみた。キャッチャーでもやってる
女の子をキャッチしてやろうかと物色してるとエライのを
見つけてしまった。

「何だよテメーは。ジロジロ見やがって。あれか？
ケンカでも売ろうってのか？この界隈であたいに
ケンカ売ろうなんててめーシロートだな？」

いやいやいやいや！見るだろ！出てるよ！
乳輪見えてるよ！お前それギャルじゃないから！
普通にそれ娼婦の格好だから！フッカー！立ちんぼ！
それを見るなって、殴っておいて痛がるなと同じくらい
理不尽な事言ってるからな？

「お？何だテメー、引く気はないってか？
上等じゃねーか。あたいの縄張りで好き勝手したら
どうなるか、その貧相な体に叩き込んでやんよ。
おう、ちょいとツラ貸しな。そこの便所で足腰
立たなくなるまでセッキョーしてやるぜ。
言っとくが、助けなんか期待しても無駄だぜ？
大声出したって誰も来やしねーからな！」

縄張りって……昭和の子かしら。スケ番？
まあ、大声出しても誰も来ないってんなら好都合。
ちょいと小娘に世間の荒波に揉まれてもらおうか。
ついでにそのデカい胸も揉ませてもらおうか。
俺は襟首をつかまれて、トイレに連れていかれた。

「あ〜〜ッ！あ〜〜ッ！ちょッ！
ちょっと待ってエ！抜いてッ抜いてエエエ！
壊れちゃう！マ〇コ壊れちゃうよお！
子宮入ってるって！チンポ子宮にズッポリ
入っちゃってるッ！こんなされたらあたい
子供生めなくなっちゃうよォォ！」

先程の強気はどこへやら、トイレに
入ってから素早く背後に回り、目にも
止まらぬ早業で極太チンポで串刺しに
してやったら、さっそく泣き言を
言い出した。世の中そんなに甘くないと
実感してる最中だろう。

俺が下からチンポを突き上げる度に
立ちんぼ娘の腹が持ち上がる。娘は涙も
鼻水も流しっぱなしで懇願するが
どこ吹く風とばかりにガンガンとビッチマ〇コを
犯してやる。

「おらおら、やめて欲しかったらマ〇コ締めて
俺をイカせてみろ！このボンコツマ〇コ！」

「あやまるからあ！悪かったからあ！
お願いだからチンポ抜いてエエエ！」

「おほ～～ッ♥……おほ～～ッ♥」
生意気な小娘をガシガシと犯し始めて小一時間、子宮・膣内がザーメンまみれになるくらいに射精してやった。やっと事が終わった安堵感と、媚薬入りザーメンの影響がじわじわきてるせいで上の口も下の口もだらしなくぽっかりと開きっぱなしだ。
「さ～て、この後は……ああ、チンポもいい感じで汚れたから、これからお前に綺麗にしてもらうとするか。おいッこれからチンポをお前の口に入れるからザーメン一滴残らず舐め取れよ」
ハ～♥
ハ～♥
ゴポッ
ゴポッ
ゴポッ
「お～～～ッ♥……おぺ～～～ッ…」
「お前のユルマンに入れたくらいで俺のチンポは満足しないからな。チンポが綺麗になったらそのまま口の中に一発射精、最後にお前が三回イクまでアナルファックだ。どうだ？うれしいか？わかったら何か返事したらどうだ、このクソビッチ！」
「わ……わかりました。おチンポしゃぶらせてもらいます……。アナルも飽きるまで犯してください……♥」
媚薬ザーメンの効果か、すっかり素直になったな。

小便器の間にしゃがませて、臨時肉便器の設置完了だ。ザーメンまみれのチンポを口の中にねじこんでやり、そのまま勢いよくのどの奥までピストンしてやる。
「うぼッ！うぼッ！うぼッ！うぼぉぉッ！」
苦しげな表情を浮かべながら、されるままに口で俺のチンポを受け入れ続けるビッチ娘。マ○コからは先程いいだけ注ぎ込んでやった俺の精子を床に垂れ流している。特製ザーメンの媚薬効果で、オナホのように遠慮なくチンポを口に入れられてる状況を涙目になりながら黙って受け入れている。
「うぼッ！ゲホッ！ゲホゲホッ！おぼッ！」
ジュポ
ジュプ
ジュポ
ジュプ
ジュプ
ジュプ
ジュプ
ジュプ
ドプッ
ドプッ

「よーしよし、いい感じだ！もう少しでイクからな！口の中にたっぷり出してやるから一滴残らず飲み干せよ！ちゃんと便器としての役割を果たせよ！そらそらそらそらッ！ぶちまけてやるッ！この便所ロ！のどの奥に直接流しこんでやるッ！」
「おほぉぉぉぉぉッ！んぶッ！おほほッ！ん～～～ッ！んん～～～～ッ！……ゴクッ、ゴクッ、ゴクッ……んぶ～～～～……うんぶ～～～～……」
ドプッ
ドプッ
ドプッ
ドプッ
ドプッ
ドプッ
ビクン♥
ビクン♥

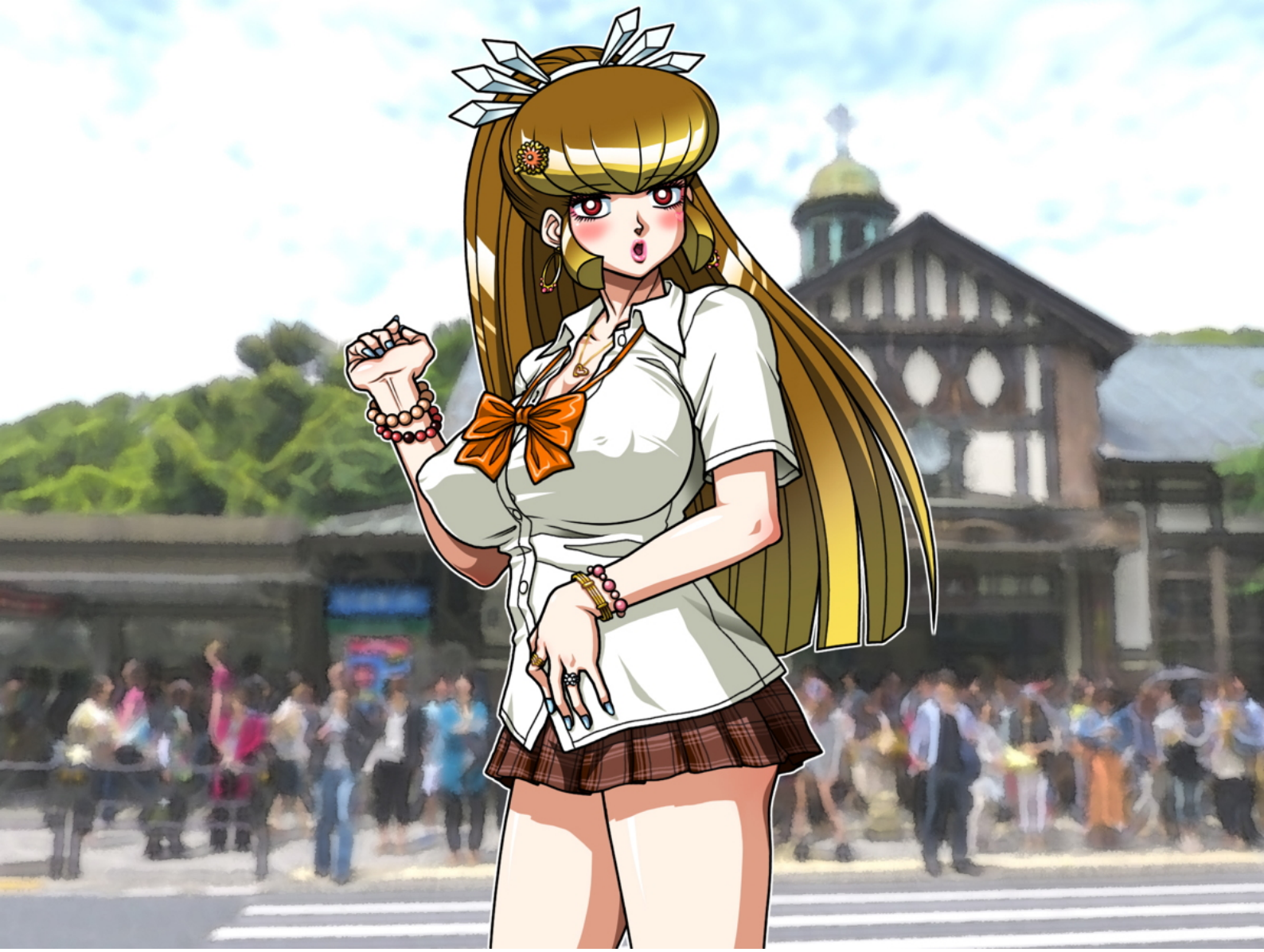
「おーいおい、こぼしてんぞ。全部飲めって言ったろ？便器がこぼしちゃ役にたたないだろうが」

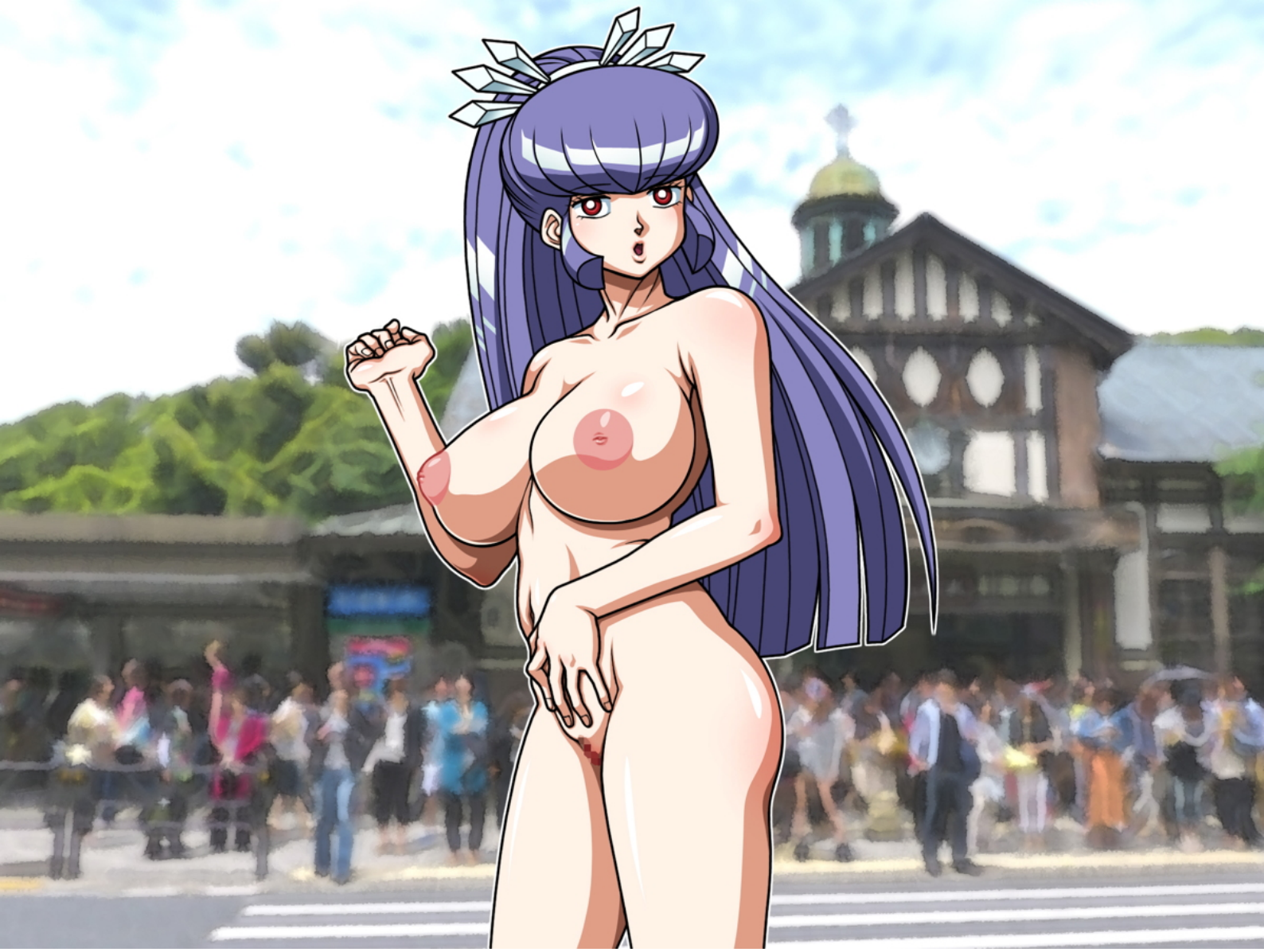
などと言ってはみたが、実際無理なのは出した本人がわかってる。ちょっとばかり出しすぎた。2リットルは出した。むしろよくここまで飲んだなと褒めてやりたいくらいだ。褒めないけど。

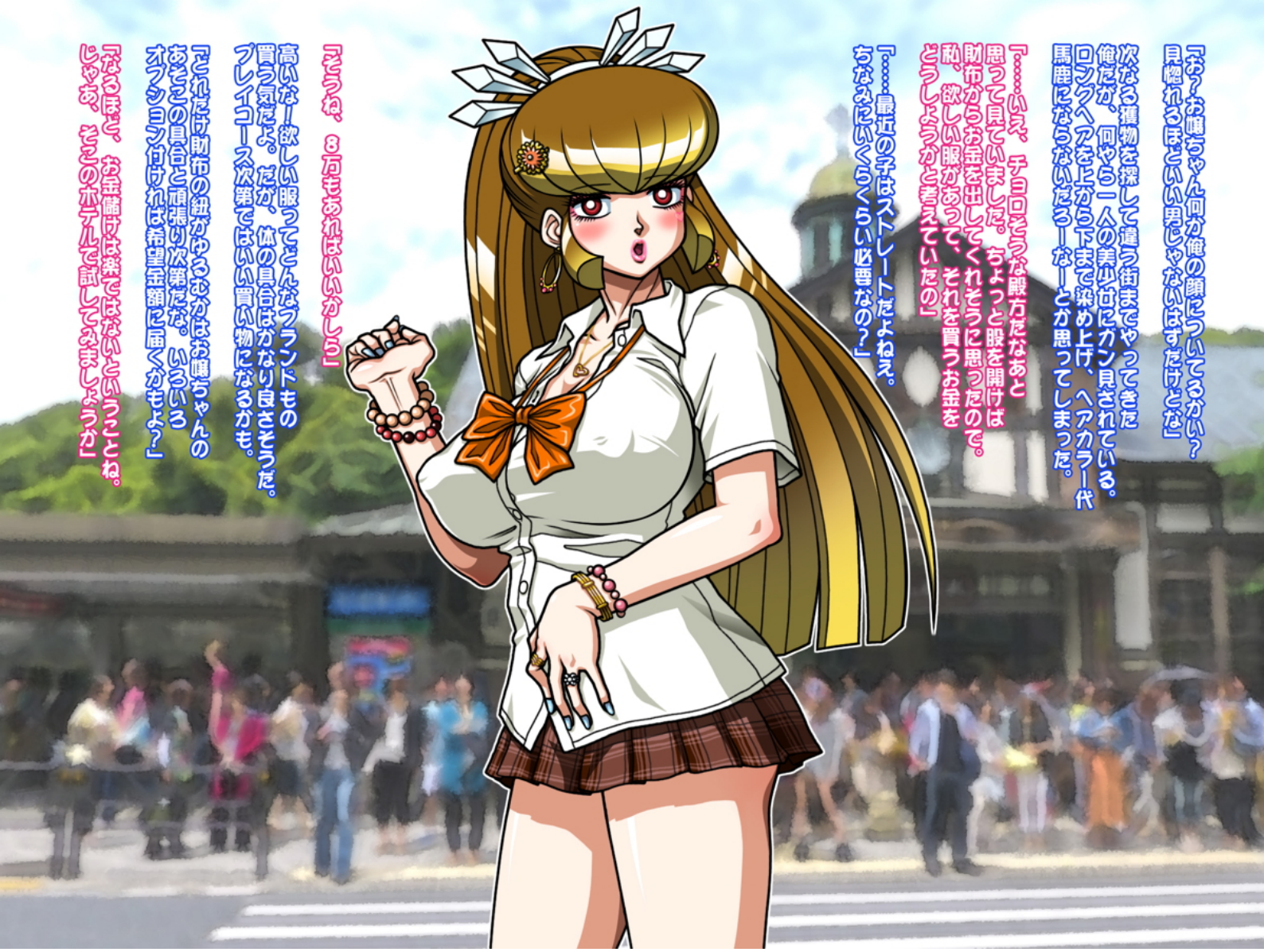
「あ〜〜〜〜……♥あお〜〜〜……♥チンポ欲しいィ……♥もっともっとチンポマ〇コに入れてグッチョグチョにしてェ♥」

「これこれ、記憶力無いのか？この後はケツ穴に入れるって言ったろ？いいか覚悟しておけよ。俺がお前のアナルで満足する頃には、お前のケツ穴はこの先一週間はオムツ必要になるぞ。ユルユルのガバガバ、腸の中丸見えになったまましばらくすごすことになるからな。それじゃあ、壁に手をついてケツをこっちに向けろ！」

その後、たっぷり一時間かけてアナルを犯してやった。腹が膨らむくらいにザーメンを注いでやったら白目をむいて失神した。







「お？お嬢ちゃん何か俺の顔についてるかい？
見惚れるほどいい男じゃないはずだけどな」

次なる獲物を探して違う街までやってきた
俺だが、何やら一人の美少女にガン見されている。
ロングヘアを上から下まで染め上げ、ヘアカラー代
馬鹿にならないだろーなーとか思ってしまった。

「……いえ、チョロそうな殿方だなあと
思って見ていました。ちょっと股を開けば
財布からお金を出してくれそうに思ったので。
私、欲しい服があって、それを買うお金を
どうしようかと考えていたの」

「……最近の子はストレートだよねえ。
ちなみにいくらくらい必要なの？」

「そうね、8万もあればいいかしら」

高いな！欲しい服ってどんなブランドもの
買う気だよ。だが、体の具合はかなり良さそうだ。
プレイコース次第ではいい買い物になるかも。

「どれだけ財布の紐がゆるむかはお嬢ちゃんの
あそこの具合と頑張り次第だな。いろいろ
オプション付ければ希望金額に届くかもよ？」

「なるほど、お金儲けは楽ではないということね。
じゃあ、そこのホテルで試してみましょうか」

「まあ、写真を撮ろうというの？
別に撮られること自体は構わないけど
ネットにアップされるということは
ないですよね？
さすがに学校にバレると、私にも立場と
いうものがありますし……」

うん、通常の反応だよな。

「そこは安心してくれ。女の子を不幸に
する気はさらさらないから。
っていうか、エッチした相手の裸の
写真をネットに出すやつの気がしれないよ。
せっかく女の子のヌード写真撮れる機会に
恵まれて、もしかしたら金まで払ってるかも
しれないのにタダで世界中にばらまくとか
どんだけ幸仕精神に溢れてるんだという」

「なるほど、一理あるね。
ちょっとゲチくさい気もするけど。
それで、今回は1枚いくら払って
くれるの？」

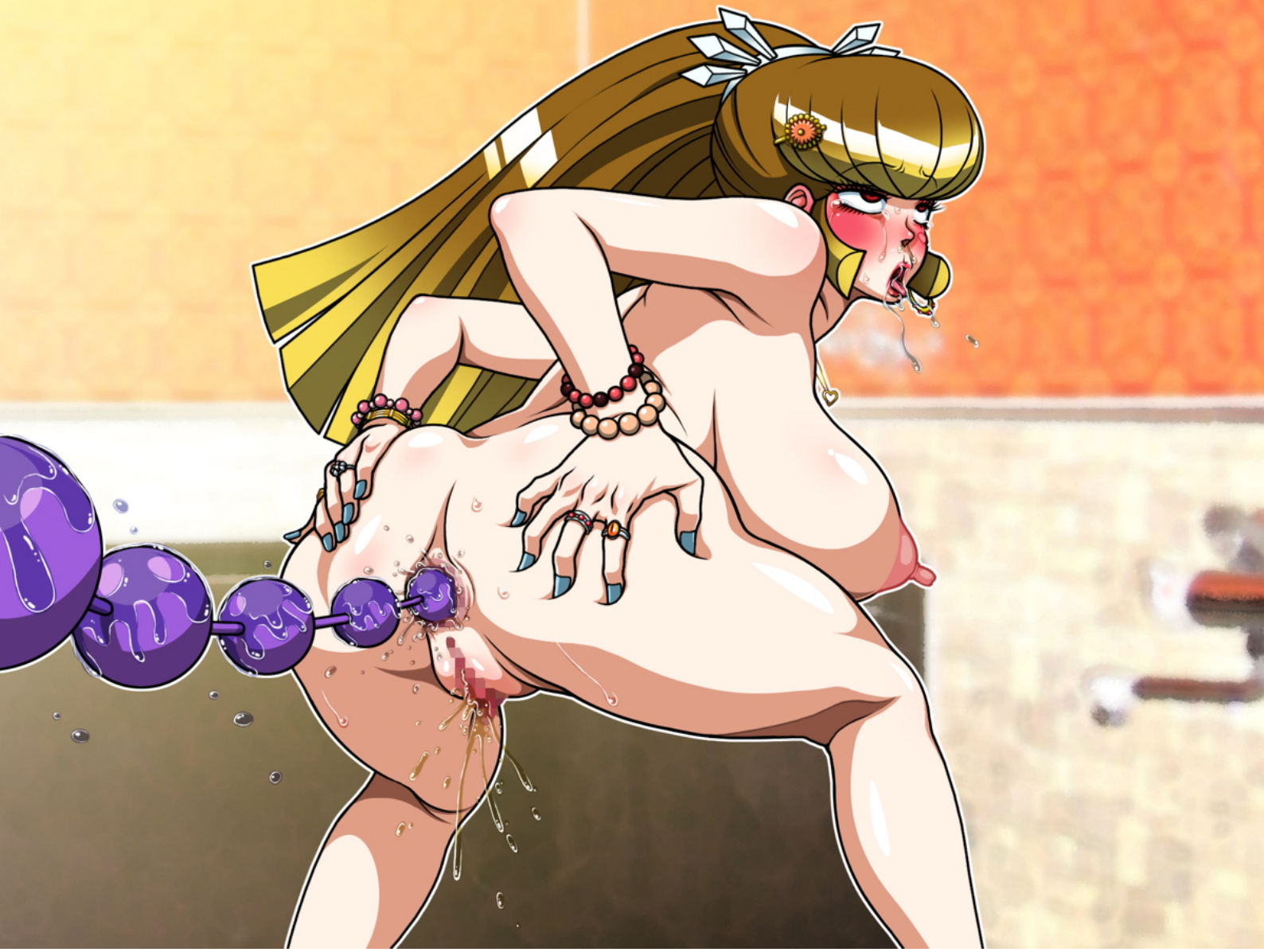
「1枚千円。たくさん撮る気になるように
エロいポーズたくさんとってな。
うんうん、アナルもマ○コも丸見えで
チンコにくるね。次は小道具を使って
みようか？」

ブルン
ブルン

ムニッ

ムニッ

「おお、ド〇キで買った二十連アナルボール、全部入るのかよと思ってたけど、入るもんなんだなあ……」
「け、結構ギリギリよ……少しでもお尻の力緩めたら中から出てきちゃうわ。や、やるなら早くやっちゃって♥」
フ〜♥
フ〜♥
プルプルと体を小刻みに震わせながら悪願するような目でこっちを見てる。腹いっぱいに入ってるボールが苦しいのとそれが一気に引ぎずり出される時の快感を想像しているのとが彼女の脳内で絡み合っているのだろう。
ちなみにこのオモチャの使用料は1万円である。決して高くはないと思う。彼女の様子を見ると、目は涙目、口からはよだれが溢れ、下のお口からもだらしなく液が溢れている。
「は、は、早くしてッ！もうそろそろ我慢も限界よッ。一気にお腹のボールを全部引っ張り出してッ♥♥もう本当、限界♥早くヤッてちょうだい♥♥♥」
もう辛抱たまらんといった感じでとうとう尻を振って催促しだしたよ。
プル
プル
プル
プル



「よーし、そらいけー！」
「お、おほぉッ♥んほおおおおおおッ♥♥♥♥」
リアルんほおキター。ちょっと笑っちゃった。
でも目の前の痴態にチンポは超ギンギンです。
これまでちょっとクール系だった
彼女はそれまでの冷静さをかなぐり捨てて、
ダチ○ウ倶楽部ばりのリアクションだ。
目は三白眼になり、涙・鼻水・涎と
フルコースで垂れ流し、陥没乳首は
これでもかとばかりに勃起している。
あ～あ、オマ○コから溢れてるのは
愛液じゃなくておしっこだな、ありゃ。
ブボブボと下品な音を立て
次々とアナルから姿を現すアナルボール。
それにあわせて女の子がガクガクと
体を振動させる。
「んおおおおお♥♥んほおおおおお♥♥」
あまりに獣じみたそのイキっぷりが
ツボだったので、その後十回連続でボールを
出し入れしてやった。動画もばっちり撮った。
ビクビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクビクッ
ズポポポポ

「あひい♥あひい♥アナルッ！アナル溶けちゃうッ！チンポそんなに奥に入れたら、私おかしくなっちゃう！おほうッ♥クリガックリトリスガッ！ダメッイッちゃう♥さっきイッたばっかりなのにまたイクゥゥゥ♥♥」

アナルボールのおかげですっかり出来上がった状態の女の子は肥大化させたクリトリスをおもちゃにしながらのアナル責めでさっきからイキっぱなしだ。

たまに俺のデカチンポを根元まで全部アナルにめり込ませると、女の子は体を仰け反らせて獣のような声をあげる。

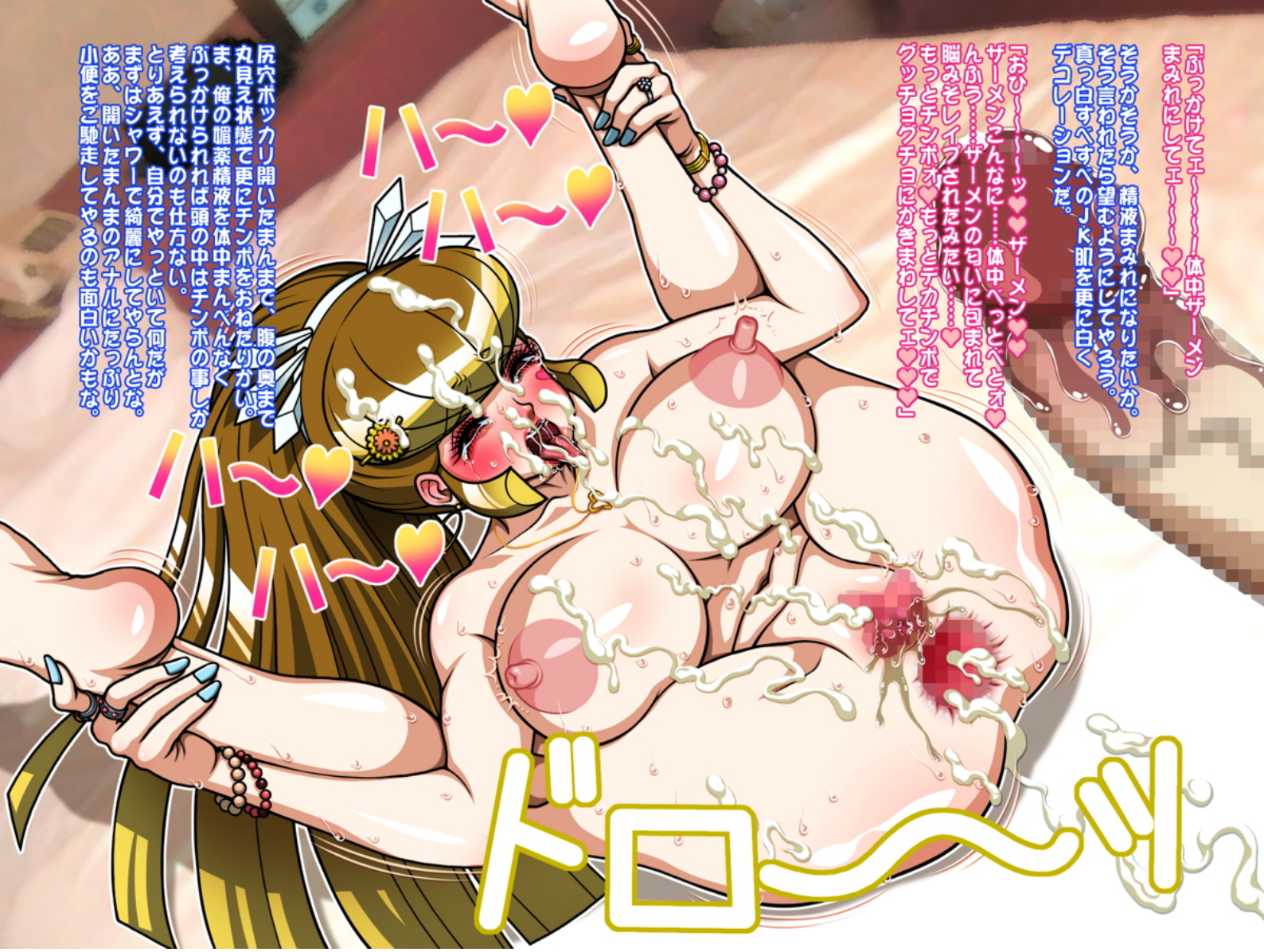
「もう？もう？一分前にイッたばかりなのに、私またイクの？セックスってこんなにスゴイの？ああッもうダメ♥チンポのことしか頭に浮かばない♥」

「よ～し、それじゃ俺もそろそろ一発目いくぞ！どうする？どうして欲しいかおねだりしろッ！」

A・たっぷりアナルに中出し

B・べっとり体全体にぶっかけ

「出してエーお腹の中にドピドピザーメン注きこんで～～～ッ♥♥♥」
本人からのリクエストも頂いたので、彼女の腸内にありったけの精液をぶちこんでやった。神（？）から貰ったチート能力で、睾丸のどこにこれだけ入っていたのかとツッコミが入りそうな大量のザーメンが彼女の腹の中に注がれた。
「あ～～～ッ♥熱い～～～ッ♥こんなに、こんなにいっぱいザーメン出されたら……んお～～～ッ♥」
低周波マッサージを最大目盛りで使用してるかのようにビクンビクンと体全体を痙攣させ、快楽に顔面を崩壊させながら知性も品も感じられない叫び声をあげる。恐らく2リットルは注いだろう精液がドボドボ尻穴から外に流れ出してくる。
「さてと、あと5万円分かあ……とりあえずオマ〇コの中の形が俺のチンポの形から戻らなくなるまでハメてやるな♪」
ビクッ
ビクビクッ
ビクッ
ビクッ
ゴポッ
ゴポッ
ゴポッ


「ぶっかけてエ～～～～！体中ザーメンまみれにしてエ～～～♥♥」
そうかそうか、精液まみれになりたいか。
そう言われたら望むようにしてやろう。
真っ白すべすべのJK肌を更に白くデコレーションだ。
「おひ～～～～ッ♥♥ザーメン♥♥
ザーメンこんなに……体中べっとべとォ♥
んふう……ザーメンの匂いに包まれて
脳みそレイプされたみたい……♥
もっとチンポォ♥もっとデカチンポで
グッチョグチョにかきまわしてエ♥♥」
尻穴ポッカリ開いたまんまで、腹の奥まで
丸見え状態で更にチンポをおねだりかい。
ま、俺の媚薬精液を体中まんべんなく
ぶっかけられれば頭の中はチンポの事しか
考えられないのも仕方ない。
とりあえず、自分でやっといて何だが
まずはシャワーで綺麗にしてやらんとな。
ああ、開いたまんまのアナルにたっぷり
小便をご馳走してやるのも面白いかもな。
ドロ～ッ

それから数日後、その子は向こうから
俺に声をかけてきた。

「やっと見つけたっちゃ！
おじさんだっちゃね？最近ここいらで
甘の子たちを片っ端からアヘアヘイカせてる
ナイスチンポミドルって」

「……え～と、どこの生まれ？仙台？」

「そんな事はどうでもいいっちゃ。
ウチが言いたいのは、ウチを無視して
ここらへんの甘の子たちを制覇した
つもりでいるなら大甘だっちゃ、と
ゆーコトを伝えに来たっちゃよ」

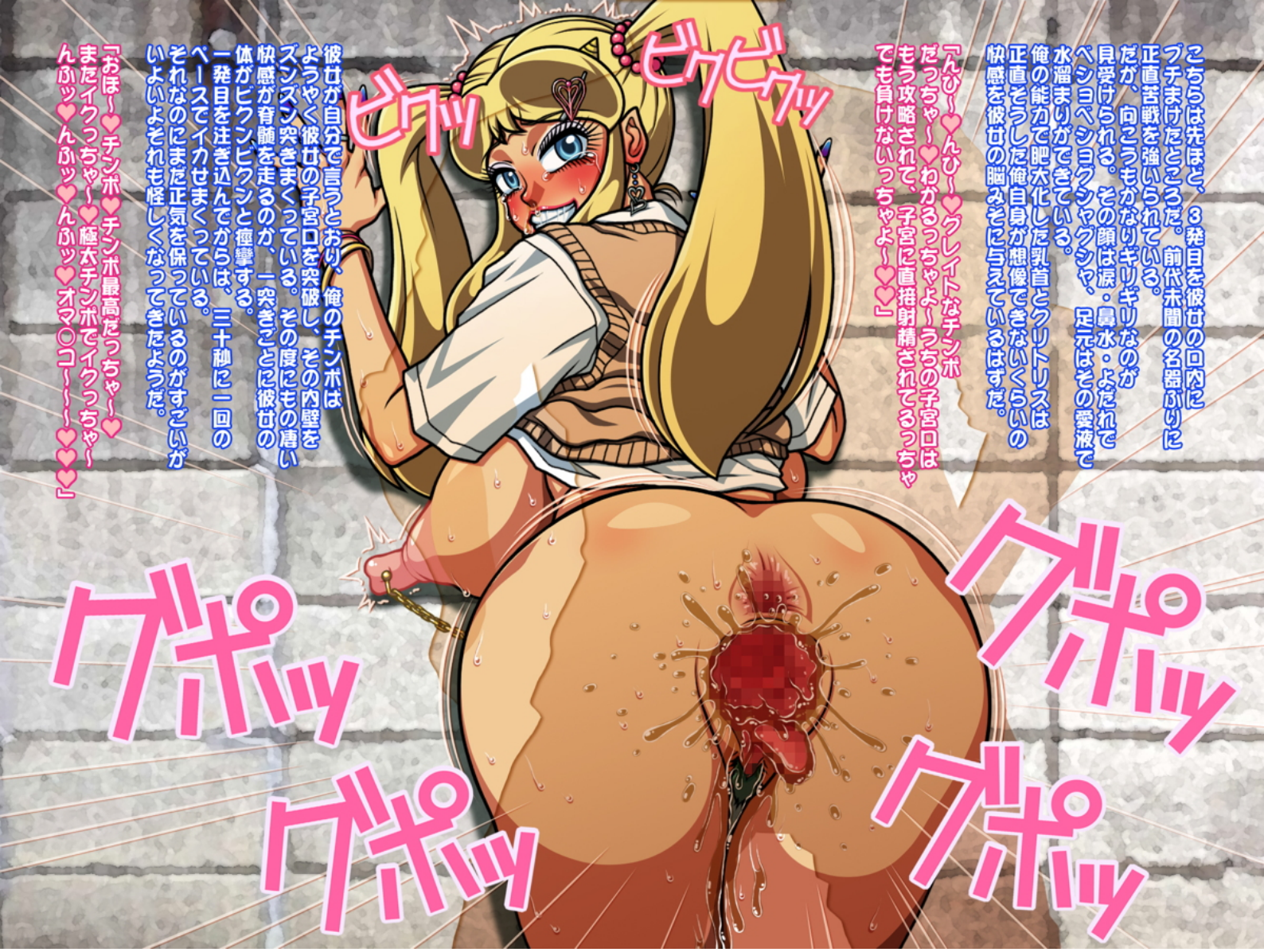
「で、俺にどうしろと？」

「簡単な話だっちゃ。どっかそこらへんで
ウチとセックスして、ウチに『まいった』って
言わせたらおじさんの勝ち！その前に
おじさんが打ち止めになったらウチの勝ち！
どう？シンプルっちゃね？」

この、変なしゃべりの甘の子が、この近辺の
甘の子たちの間でどんな立ち位置なのかは
わからんけど、転生してチートチンポを
授かった身としては、こんな勝負を持ちかけ
られて尻込みするわけにゃいかないよね。
どんな名器マ〇コだろうが、かかってこい！

「外か！外でかよ！人通るわ！」
「んふ～♥スリルあっていいっちゃ♥最近、普通のセックスじゃ物足りない感じだし。いい機会だっちゃ♥♥」
「スポン！スポンびしゃびしゃだし！俺がおもらししたみたいに見えるよこれ！スケベ汁めっちゃ出てるじゃん！」
「当たり前だっちゃ♥こんなストロングなチンポハメて濡れないオマ○コなんて、世の中に存在しないっちゃよ♥先っぽがウチの子宮口をガンガンノックしてるっちゃ。これは子宮口がこじ開けられるのも時間の問題だっちゃね♥」
何てコトを言ってる彼女だが、なかなかにその扉は硬い。そして締まりが半端ない。自ら勝負を挑んでくるだけあるね。そこらの若い奴らなら1分もたずに射精してるだろうな。
しかし、転生してチート能力をもらったこの俺だ。そうそう負けるわけにはいかん！
死ぬほどチンポを突きまくって、まいったと言うその口をチンポで塞いでたっぷりザーメンを飲ませてやるぞ！
ブルン ブルン
ブルン ブルン
グポン グポン

「むむうッ！」
我慢しきれず、あつあつオマ〇コにたっぷり中出ししてしまう。対して、彼女はまだ2回しかイかせていない。久しぶりだよ、こんなのは。
ビシッ
「ぬふふ～～～……まずは1発だっちゃね。残弾は果たしてどれぐらいだっちゃ？ウチはまだまだイケるっちゃよ～？」
ドピュ
ドピュ
ドピュ
クソッ！言うじゃねえか！しかし勝負はこれからだ。俺の特製媚薬ザーメンがたっぷりと注がれた。この後、彼女のオマ〇コはこれまでの何倍もの快感に晒されることになる。今はまだ笑みを浮かべながら、こちらを挑発する余裕があるみたいだが、時間が経てば経つほどこちらが有利なのさ。見てろよ？二回戦目はこち……
ビクッ
ビクビクッ
「な～んかグダグダと考えてるっちゃね？ほらほら、すぐにネクストラウンド開始だっちゃ！ウチのオマ〇コもイイ感じに温まってきたっちゃ♥搾り取るっちゃよ～～～～♥こんなナイスチンポそうそうめぐり合えないし、とことん堪能するから覚悟するっちゃ♥♥」




こちらは先ほど、3発目を彼女の口内にブチまけたところだ。前代未聞の名器ぶりに正直苦戦を強いられている。だが、向こうもかなりギリギリなのが見受けられる。その顔は涙・鼻水・よだれでベショベショグシャグシャ、足元はその愛液で水溜まりができている。俺の能力で肥大化した乳首とクリトリスは正直そうした俺自身が想像できないくらいの快感を彼女の脳みそに与えているはずだ。

「んひ〜♥んひ〜♥グレイトなチンポだっちゃ〜♥わかるっちゃよ〜うちの子宮口はもう攻略されて、子宮に直接射精されてるっちゃでも負けないっちゃよ〜♥♥」

彼女が自分で言うとおり、俺のチンポはようやく彼女の子宮口を突破し、その内壁をズンズン突きまくっている。その度にもの凄い快感が脊髄を走るのか、一突きごとに彼女の体がビクンビクンと痙攣する。一発目を注ぎ込んでからは、三十秒に一回のペースでイカせまくっている。それなのにまだ正気を保っているのがすごいがいよいよそれも怪しくなってきたようだ。

「おほ〜♥チンポ♥チンポ最高だっちゃ〜♥またイクっちゃ〜♥極太チンポでイクっちゃ〜んふッ♥んふッ♥んふッ♥オマ〇コ〜〜〜♥♥♥」

「あふ～～～♥らめらっちゃ～～～♥オマ〇コ～♥
チンポズボズボって、オマ〇コイクっちゃ～♥
あつい～～～お腹のザーメンアツアツドロドロ
おほほ～♥もっとチンポクチョクチョマ〇コ
ドピコドピュって、もっとイカせて～～～♥♥」
うん、これは俺の勝ちだろ。TKOってやつ。
もう彼女の目は焦点があっておらず、その口から
出る言葉は意味不明。体は痙攣を繰り返し
ぽっかり開いたオマ〇コからは大量のザーメン
巨大な乳首からは触ってもいないのに母乳が
ピューピュー噴き出している。
「聞こえてるか？勝負は俺の勝ちな。今後
お前は俺の肉奴隷ってことでヨロシク」
ビクン♥
ビクン♥
ビクン♥
ビクッ
ビクビクッ
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ピュ～ッ
「んふ～～～♥ウチの穴、全部好きにして
ザーメンドピコドピュ出すっちゃ～～～♥
おしっこの穴にデカチンポぶっ挿して
膀胱ザーメンでいっぱいにして
ザーメンおしっこびゅ～って出すっちゃ～♥」
脳みそトロトロの割にはいい提案をしてくるな。
俺の能力で尿道広げて、彼女が言ったとおりに
尿道ファックと洒落こもうか。
とりあえず人目を避けながら、いろいろ丸出し
ザーメンダラダラの彼女をこのまま連れ回そう。

俺は一度死んだ。
車に轢かれそうになった子供を助けようとして、代わりに自分が轢かれてあの世行きになった。
そこで神様らしい存在に自分の死が手違いだったとの説明を受け罪滅ぼしではないが望む能力を付与されて転生できるとのことだった。
陳腐なラノベのような展開であったがとりあえず素直にその提案を受け入れ転生を果たした。
それはいいのだが、転生した先は現代日本。元々俺が住んでたとこの隣町。なんじゃそれと思ったがまあいいやと思い直し、手に入れた能力を使ってみようと街へ繰り出した。
で、今現在、街ですれ違った尻のエロい人妻の自宅でかれこれ2時間はハメまくっている。
もらった能力というのが「魅了」「催淫」「感度増加」などなどセックスに関するものばかりだ。
このカのおかげで、出会ったばかりのこの人妻はあっさり股を開き世間にお見せできないような顔で十二回目の絶頂を迎えようとしている。
「おこ～～～ッ♥チンポオ♥チンポすごいのぉ♥お願い、出してぇ！あなたのザーメン私の子宮にドバドバ出しちゃってぇ♥♥」
ガク
ガク
ズチュ
ズチュ
ズチュ
ズチュ
ズチュ
ズチュ

ここまでずっとハメっぱなしだったが
ついぞ射精だけはしないでいた。
というのも、転生後の俺のザーメンは
超強力媚薬になっていたのだ。

他の効果だけで見ての通りの
イキまくり状態な訳で、この上
超強力媚薬の上乗せがあったらこの
人妻はどうなってしまうのか少〜し
心配だったのだが、当のご本人からの
リクエストだ。

便利なことに、自分の意思で生殖機能の
オンオフができるので、相手を妊娠させる
心配なく中出ししてやれる。
もっともそんな事を言っても信じて
くれる訳ないし、言うつもりも無い。

さっそく人妻の子宮を亀頭で
こじ開けて、子宮に直接射精して
やった。ザーメンがドビュドビュと
子宮の内壁に叩きつけられる度に
人妻の体が歓喜のあまりビクンビクン
痙攣する。

「ひいいいいい♥♥何これ！
イイッ♥イイッ♥溶けちゃう♥
オマ〇コ溶けちゃう♥子宮溶けちゃう♥
だめえッ、こんなに何度もイッたのに
もっとチンポ欲しいいいいい♥♥
チンポッチンポッチンポッチンポッ
もう、あなた専用のオナホールで
いいからッ♥死ぬまでハメてぇ♥♥」

もうオマ〇コはゆるゆるで使い物に
ならなかったので、この後アナルで
更に八回イカせてやった。

あらためて街に繰り出すとギャルっぽい女の子から
声をかけてきた。

「なあなあおっさん、さっきから何キョロキョロ
してんだ？もしかしてナンパ相手物色してんの？
だったら俺とかどーだ？今ちょうどヒマしてたんだ
よなー。美味いもん食わせてくれんなら
ついてくぜ」

ボクっ子ならぬオレっ子だった。
まあ、ギャルなんてのは大抵言葉使いが乱暴な
もんだけど、体は十二分に女らしい。シャツの下は
ノーブラらしく、乳首の位置が丸わかりだ。

「美味いもんかあ。最近の子は
どんなものが好みなんだ？」

「ヒントやろーか？俺、長くて太くて
硬いヤツとか大好物だぜ♥」

そっちか！そっちの話か！
まあ、渡りに船である。面倒くさくなくていい。
こちらも最初からそれが目的だ。
お互いの意思疎通が滞りなく行われた後
意気揚々と近場のラブホテルへと直行した。
俺の右腕に自ら腕を絡ませてきたオレっ子は
期待を滲ませた満面の笑みを浮かべている。
相当な肉食系ビッチと見た。

「さ～て、本番に入る前にちょっとした
試験だぜ。俺もヘタクソとセックスするのは
御免だからな。
まずはクンニでイカせてもらおうか？
結果次第では時間無制限、生で中出し
し放題ってわけだ♥」
なかなか生意気なことを言ってくる。
まあ、街で出会ったばかりのおっさんだ。
どんなヤツか知りたくなるのも当然では
あるが。それでも躊躇なくマ○コさらけ出して
見せ付けるのは奔放にも程があるけど。
しかし、相手によってはそれが決定的な
致命傷になるということを、この尻軽メスガキに
骨の髄まで教えてやらなきゃな。
見たところ、経験人数がどれほどになるか
わからないようなビッチギャルにしては
驚くほど綺麗なマ○コだ。陰毛も必要なところ
以外は丁寧に剃られている。
男に舐めさせようとするからには、その辺の
気遣いはきちんとしているということだろうか。
ここは本気の舌技を披露してやろう！
ニッ♥
ムチムチ
プリン♥

「うひゃっ！うえッ？何っこれッ！
ちょっ、おっさん何者だよ！こ、こんな
ちょー気持ちいいクンニ、生まれて初めて
だぜ♥うひいい！しびれるッしびれるう！」
まるで電気ショックでも受け続けているかのように
目の前の少女が体をビクンビクンと痙攣させる。
百戦錬磨のビッチですら経験したことのない
嵐のような快感に、まるで為す術がないといった
様子だ。ベロベロと嘗め回すマ〇コからは
とめどなくスケベ汁が湧いてくる。
「ちょッ、まッ、ウソッ！イクッ？イクのッ？
こんな早く、まだ、1分も経って、ええええッ？
うひい♥うひい♥うひい♥気持ちいいいいッ♥♥」
まあ、常人がそうそう耐えられる訳がないんだ。
俺の唾液は感度を十倍くらい跳ね上げる作用が
ある。そんな状態のマ〇コを最高に感じる微妙な
力加減で的確に嘗め回しているんだ。そこらの
小娘が我慢できるような快感じゃない。
「だめええ♥イクッ♥オマ〇コイクッ♥オマ〇コッ♥
うほお♥イクウウウウ♥♥♥♥」
ビクッ
ビクッ
ビクビクッ
ビクッ
ビクビクッ
ビクッ
ビクッ

「うおっと、危ない危ない。
危うく文字通りの顔面シャワーくらうとこだった」
寸前で体を翻す。アクメと同時に勢いよく
マ○コから潮が吹き出てきた。量が多いのでもしかしたら
普通におもらしかもしれない。
「あ～♥…ああ～～～♥…
クンニでこんな満足したの生まれて初めて……♥
なあ、おっさん、いつもこんなすげー前戯
相手の女にかましてんの…？こんなんされたら
相手の女ほっとかねーだろ。おっさん、今
フリー？もしあれだったら……」

ビクビクッ

プッシャッ!!

「おっと、そんな話はまだ早いんじゃないか？
確かさっきの話じゃあ、クンニで満足させられたら
ゴム無しで口でもアナルでもオマ○コでも射精し放題
回数無制限って約束だったよな？」
「あえ？そうだったっけ？そんなこと言ったような
そこまで言ってないような……まあいっか
別にこっちも損しないし。でもあれだなあ……
1分間のクンニでこんなにスゴいんなら
本気でチンポはめられたら、俺死んじゃうんじゃ
ねーだろうか……♥」

プルッ
プルッ
プルプルッ

いやはや、ひどい顔で俺のチンポをくわえ込んでいる。
ちょっと他人様にはお見せできないような顔で、息も絶え絶えで喘ぎまくっている。
まあ、仕方がない。ここまでにアナルに2発、口内に1発、顔に1発マ〇コに1発射精してる。俺の超強力媚薬効果付きのザーメンをこれでもかと注がれて正気でいられる訳がない。
目の前のオレっ子ちゃん、イッた回数は軽く三十回を超えている。失神してはチンポを突っ込まれて目を覚ますのを繰り返している状態だ。

「おま〇こッ♥チンポッ♥チンポッ♥おほおっっ♥♥おま〇こチンポッ♥死ぬッ♥チンポで死ぬッ♥おま〇こ死んじゃうザーメンビュビュッって、ビュビューッってえ子宮トロトロに溶けちゃってるぅ♥」

ありゃりゃ、もう半分あっちの世界にイッちゃってるなあ。
ま、こちらもそろそろ満足したし最後の射精といこうか。

最後ってことでサービスだ。
出し惜しみなし、でかいペットボトル1本分の精液を直接子宮の中に注いでやることにしよう。
おそらく、今後1ケ月は頭もマ〇コも俺のチンポを忘れることができなくなるだろう。

「よーし、出すぞ！最後にオマ〇コって絶叫しろッ！」

「お　ま　〇　こォ～～～～～～♥♥」

だいぶ時間が経って、やっとオレっ子ちゃんも落ち着いてきたらしい。目の焦点も合ってきた。ちなみに彼女が今見てるのはビンビンに肥大した自分の巨大クリトリスだ。それが自分の体の一部なのを、現在のトロトロ脳みそでは理解できないっぽい。これも俺の能力のひとつで、触った相手の体の形状を自由にいじられる。これから彼女は、誰かにチンポを挿入される度に、乳首とクリトリスが大粒のグミ並みに勃起する体になったわけだ。

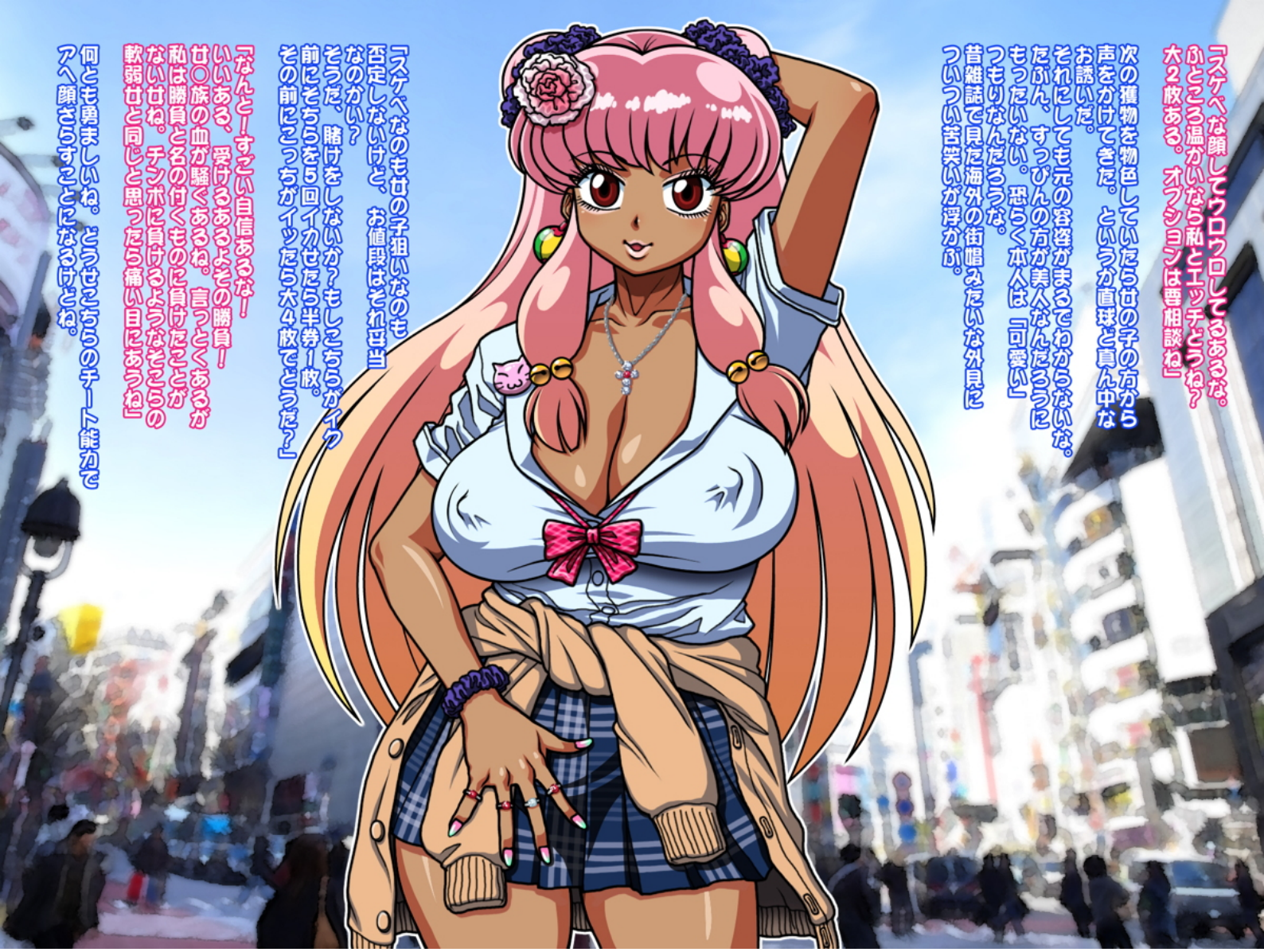
「何でぇ？何で俺のクリトリス、こんなにでっかくなってんのぉ？……それにしすっごいジンジンしてたまんないぃぃ……」

「おー、喜べ。この状態になったら感度が通常の5〜6倍になるから。だからちょっといじくっただけで……」

「うあぁっ♥おほッ♥おほぉぉッ♥うひいいいい、いひぃ〜〜〜〜ッ！」

「な？すぐにイッちまったろ？」

それにしてもJKのガッパリ開きっぱなしオマ〇コとアナルからゴポゴポとザーメンが溢れてるっていうのは、ちょっといい画だな。オレっ子ちゃんの頭の中がトロトロなうちにスマホで写真撮っておこうかな。その前にもう少しこの子のオマ〇コで遊ぶとするか。ビンビンに勃起したクリトリスをしごきながら、すっかり弛緩してゆるゆるの尿道に人差し指を出し入れする。オレっ子ちゃんは舌を出しながら顔を仰け反らせ、声にならない嬌声をあげた。



「スケベな顔してウロウロしてるあるな。ふところ温かいなら私とエッチどうね？大2枚ある。オプションは要相談ね」

次の獲物を物色していたら甘の子の方から声をかけてきた。というか直球ど真ん中なお誘いだ。

それにしても元の容姿がまるでわからないな。たぶん、すっぴんの方が美人なんだろうにもったいない。恐らく本人は「可愛い」つもりなんだろうな。

昔雑誌で見た海外の街娼みたいな外見についつい苦笑いが浮かぶ。

「スケベなのも甘の子狙いなのも否定しないけど、お値段はそれ相当なのかい？

そうだ、賭けをしないか？もしこちらがイク前にそちらを5回イカせたら半券1枚。その前にこっちがイッたら大4枚でどうだ？」

「なんと！すごい自信あるな！いいある、受けるあるよその勝負！甘○族の血が騒ぐあるね。言っとくあるが私は勝負と名の付くものに負けたことがない甘ね。チンポに負けるようなそこらの軟弱甘と同じと思ったら痛い目にあうね」

何とも勇ましいね。どうせこちらのチート能力でアヘ顔さらすことになるけどね。

「ちょ、フェラだと勝負成立しないよ？せめてシックスナインとかじゃないと」

「あ～大丈夫ね。これはあくまで前哨戦よ。目の前のこんな立派なチンポをしゃぶらないとかありえないね♥ホント、子宮がうずくチンポね。これは勝負が楽しみある」

うん、本当に嬉しそうにいい顔で、俺のチンポを一心不乱にくわえている。

しかもテクもながなが。くわえた口の中で器用に舌を動かしてチンポを舐め回している。正直何の対策もなしだったらあっという間に射精してたと思われる。もっとも、今の俺はもらったスキルのおかげで射精のタイミングも出す量も自分の意思で自由自在だ。便利便利。

「でも、逆にこっちが有利にならない？これ。勝負前に一発出しちゃっていいの？いいんなら遠慮なく出しちゃうけど……いいね？何か返事するくらいならしゃぶりたくてしようがないくらいな目してるから、イッちゃうよ？」

そういう訳で遠慮なく射精しようか！

「うぶッ！うぶぶッ～～～ッ！」

おおッ、自分でやっといてなんだけど
まるで餅かリスがアンパ○マンがってな
顔になってるね。
鼻からザーメン噴き出して涙目だね。
それでも根性あるなと思ったのは
少しでもザーメンをこぼすまいとしてるのか
咥えたチンポを離さないよ、この子。

「むふ～…むふ～…むふ～～ッ」

「大丈夫か～？無理しなくていいぞ～？
この後勝負するんだから無駄に体力とか
いろいろ消耗しない方がいいんじゃないかい？
……って、飲むの？ザーメン飲むの？
うおッ、ゴキュゴキュいって飲んでるねえ。
本当に大丈夫かい？そんなビールジョッキで
飲むみたいな感じで……その目は何？
なんか「いいとこなんだから邪魔すんな」みたいな
感じに見えるんだけど……気のせいじゃないな。
お～～、ほっぺたどんどん縮んでいってるね」

やがて、口内のザーメンを飲み干した
彼女は、チンポを咥えたままドヤ顔で
俺の顔を見上げたとさ。

「ふっっっはっ～～～～～～～♥
スゴイスゴイ♥スゴイあるね♥♥
今まで結構な数の男とセックスしたあるけど
こんな大量のザーメンは生まれて初めてね！
もの凄く濃くて匂いが強くて味もサイコー
だったある♥
まさに三ツ星高級飯店の看板料理に匹敵
する一品あるよ♥」
すんごいテンション高いな！。
ま、超媚薬な成分の俺のザーメンを
あんだけ大量に飲めば気分も高揚するわな。
しかし、ご当人は今の状況を自分で気付いて
いるのかなあ？
「さあ、前座はこれくらいにして本番に
突入ね！何か知らないけど私のオマ○コは
これ以上ないくらいに準備万端、濡れ濡れの
ビショビショね♥
サクッと勝負に勝って、その後にたっぷり
このビッグチンポを堪能させてもらうある♥」
残念ながら結果は見えている。出来レースも
いいとこだ。目の前のこの娘がアヘ顔さらして
絶叫するまであと3分。
ハ～♥
ハ～♥
ハ～♥

「アイヤ～～～～～♥♥♥」

本日八回目の大絶叫が、ラブホの部屋の中に
響き渡る。体をビクビクと痙攣させ、鼻水を垂らして
イキまくっている。
こちらはそんなことおかまいなしとばかりに
黒ギャルマ○コを極太でずんずん突きまくる。
この時点で賭けは俺の圧倒的勝利な訳だが
たぶん目の前のビッチマ○コはそんな事
これっぽっちも頭に残ってないだろう。
自信満々なだけあって確かに締まりは結構な
代物だった。そこらの男ならあっという間に
射精してたろうと思うくらいには名器であった。
ただし今ではかなりゆる～くなって
このままではこちらも楽しくないので
さて、どうしたものか……。

「アイヤ～♥アイヤ～♥
信じらんないある！信じらんないある！
デカチンポが私の子宮をパコパコ犯してるある！
こんなチンポ初めてある♥ザーメン出すッ！
早くザーメン私のマ○コに出すよッ！
私の子宮、ザーメンで溺死させるあるよッ！」

もう、あらゆる所から液を垂れ流しながら
彼女やる気まんまんである。
残念ながら緩くなったマ○コをキツキツに
戻すスキルは持ってない。
さてさて、どうしたものかといい方法を
模索する。膣を動かしながら。

よし、とりあえず刺激を与えてみよう。
調子の悪い家電方式だ。
目の前でタプンタプンと揺れているデカ尻を
平手でひっぱたいてみる。

「ふぎッ！おほおぉぉ？」

非常にいい音が出ました。そして期待通り
緩んでいたオマ〇コが瞬間キュッと締まった。
締まった瞬間にピストンされるチンポが
黒ギャルちゃんのイイトコを擦りあげるらしく
歓喜の声がその口から漏れ出す。
よしよし、方向性は間違ってなかった。
後はリズミカルにこれを続ければいいわけだ。

「ふひッ！おほッ♥……ふひッ！おほッ♥
あぎッ！んほッ♥……ふぎッ！んはッ♥」

何か、セックスをしてるというより
太鼓を叩いている感覚になってきた。
これがまたいい音するんだよね。デカくて
張りのある尻なのでついつい調子にのって
連打をかます。気分はハワイの打楽器奏者だ。

「アイヤー♥アイヤー♥叩かれて気持ちいい
なんて私変態ね！でも変態でもいいね！
このチンポに犯されるならもう、何でも
構わないあるよ♥……おびッ！イグッ！
またイクあるよッ！競馬馬みたいに尻叩かれながら
またイッちゃうううう♥♥」

「むう……」

思わず不満の声が口からもれる。
眼前には鏡のように尻を真っ赤っ赤にした
黒ギャルちゃんが俺のザーメンを全身に
浴びた状態で肩で息をしている。
だがしかし、背中にぶっかけというのがどうにも
面白くない。絵面的につまんない。
やはり顔面か胸に出してこそのBUKKAKE
だと自分は思うわけですよ。
自分の選択ミスに忸怩たる思いを抱きながら
ザーメンにまみれたクリトリスをクリクリと弄ぶ。

「おふッ♥おふぅ、おふぅ♥」

小刻みに痙攣しながら悦びの声をあげる。
ザーメン媚薬はちゃんと仕事をしてるようだ。

「よう、お嬢ちゃんどんな感じ？第2ラウンド
いけそう？若いんだから体力はまだまだ
大丈夫だよな？おじさんちょ～～～ッっと
消化不良なもんだからさ。悪いけどもう一発
付き合ってもらうな」

そう言いながらアナルにザーメン付きの指2本を
ねじ込み、肉壁にザーメンを塗りつけるように
してねっとりとかき回す。
オマ○コはしばらく使い物にならなさそうなので
後ろの穴を使うことにしよう。今度は黒い顔が
真っ白になるくらい顔にぶっかけてやる。

若い子ばかりハメ続けてきたので
ちょいと路線を変えて人妻、それも旦那を
ゲット。ちょっとヤンママ風な美人さんだ。
街中で声をかけたら二つ返事で自宅に
招き入れてくれた。

「おほ～♥やっぱり生チンポはええなあ♥
この腹になってから、ダンナがすっかり
ヤル気無くしてもうてなあ。
んふッ♥うふッ♥デカチンポ最高やあ♥
アタシ相当溜まってたさかいなあ
キンタマ空になるまで付き合ってもらうでえ♥」

ポテ腹人妻は、ひさびさの
チンポにご満悦のようだ。
非常に非常にご満悦だ。
俺の極太を絶妙に締めあげる
そのマ○コには、若い子には
ない味がある。
もっとも、子供が出てきたら
困るので、子宮口を開けない
ようにそこは慎重に挿入してる。

「んふ～～～♥お腹には可愛い
我が子、オマ○コにはデカチンポ
正にお幸せ～に極まりやわ♥
あ～イキそう♥あ～イキそうや♥
こんな早うにイクやなんてスタチンポやから？
ええね、早うイクんに悪いことないわな
この調子やと、ダンナが帰ってくるまでに
百回くらいイッてまうんやないやろが
お♥お♥お♥イクで♥ポテ腹おばさんの今日
最初のイキ顔、見たってや～～～♥」

ズポッ
ズポッ
ズポッ
ズポッ

ピュ～～ッ
ビクッ
ビクッ
「おおおおぉおぉ～～～～～～～～～♥♥♥♥」
まるで動物のような叫び声をあげて絶頂を迎える人妻さん。妊娠で黒くなった乳首からは大量の母乳が噴水のように吹き出ている。俺が彼女のオマ○コに最初のザーメンを大量に注ぎ込んでやったと同時に、体中を痙攣させてイッたようだ。これはもう、絶頂のその上、大絶頂だ。（そんなのがあるのか知らんが）
「止まんない～～～！イクのが止まんない～～～！ダメ～ッ♥オマ○ゴ～～♥もっとちょうだい～♥流産してもいいからもっともっと犯して～～ッ♥」
何やら物騒なことを口走りながら、更なるチンポを要求してるね。あ～あ、開きっぱなしのオマ○コからは流し込んだザーメンがドプドプとこぼれている。俺はテーブルの上にあったコーヒーカップを手にして、その中にこぼれたザーメンを溜め込む。
ビクッ
ビクッ
ビクッ
ピュ～～ッ
「ほらほら、せっかくの搾りたて新鮮なザーメンだ。はい、飲んで飲んで。おお、いい飲みっぷりだね。さて、次はどうするかな。オマ○コを休ませるために、アナルにぶち込もうか？それともおっぱい搾りながらチンポしゃぶってもらおうかな？あ、能力使ってニプルファックしちゃおうか？」お楽しみはこれからだ、ってね。

FUCK ME PLEASE
I LOVE MENS

少〜し、さざくれだった心持ちのまま
外に出た俺が見つけたのはケバいメイクの
下にも愛嬌のある笑顔を湛える女の子。

「なんやなんや、おっちゃん。むずかしー
顔しおって。笑っても悪っても同じ一生
なら笑わな損やで♥人間、お腹いっぱいで
気持ちいいセックスしてりゃ自然と
笑顔になるもんや。
なあ、もしうちでええなら相手するで
こう見えてうち、セックス大好きやねん♥」

こう見えてって、どう見えてると思って
いるのかはわからんけど、その子は
とびきりの笑顔であっけらかんと
セックスのお誘いをしてきた。

「え〜〜と、いくら?」

「ラブホ言わんといて!エンコーちゃうで
自由恋愛や、自由恋愛!あ、でもホテル代は
出してな。うちもあんまりお金無いねん。
その代わり!おっちゃんツイとるで!
今日な、うち安全日やねん♥中出し
し放題やで!やったなおっちゃん!
ほな、ちゃっちゃとそこのラブホに行こか♥」

キャッチセールス並みの強引さで腕を引かれ
引きずられるようにして俺はラブホテルに
連れ込まれた。

入ったラブホのシャワー室で
さっそく即ハメだ。彼女の方も
受け入れ態勢万全で、触る前から
マ○コはビッショビショだ。

「え〜お〜おほッ♥何やのん、これ♥
こんなすっごいチンポ初めてやわ
うはあ♥うほお♥ちょっとこれ♥
洒落にならんわあ♥うちが今まで
ハメてきたチンポなんてパチモン
だったんやなあ！
これがホンマモンのチンポなんやね
くっはあ、ちょっ、これ、子宮に
入ってへん？
あひい♥あかん、最高や最高すぎるッ
こんなチンポ知ってもうたら
他の男共の粗チンなんかアホ
らしゅうてハメてられへんわ！」

女の子のテンションもMAXだ。
しかも、彼女のマ○コは俺のチンポとの
相性は最高のようだ。ちょっと記憶に
無いくらい具合がいい。俺は夢中で
彼女のマ○コを犯し続けた。その
テンションが影響してか、彼女の
感じ方も俺の能力を差し引いても
異常なくらいによがっているようだ。

動物のような雄叫びをあげながら
大量の精液を子宮に直接注ぎ込む。
こんな充実感のある射精は久しぶりだ。

「おほ～～～

場所をベッドに変えてあらためて
たっぷりとチンポをぶちこんでやる。
マ○コの方はザーメンを注ぎすぎて
タプタプになってしまったので
今はアナルに挿入中だ。
まったくもって彼女との体の相性は
抜群だ。それはアナルも例外ではなく
まるで俺のチンポ用に開発されたかの
ように、具合良く絶妙に俺のチンポを
締め付け、擦りあげる。

「あああああ〜〜〜〜♥♥♥
ウソ、ウソぁあッ！初めてのアナルで
こんなに何度もイクなんて、あううう♥
お、おかしくなってまう！こんなん
腸内にザーメン注入されたら絶対、頭が
おかしくなってまうわッ♥
キ○ガイやッ！もうウチチンポキ○ガイに
なってもうたんや！
あおッ♥あおッ♥あおッ♥あおッ♥
イクッ♥イクッ♥イクイクイクイクッッ♥
あひいいい♥♥♥」

ズチュ

ズチュ

ボチュ

ズチュ

彼女はもう半狂乱だ。白目をむいて
悦びの絶叫をあげる。
俺のチンポでこれだけ悦んでくれるのが
妙にうれしくて、アナルをえぐる
腰の動きが更に激しくなる。

「死んでまうッ♥うち死んでまうッ♥
ハメ殺す気やろ♥イキ殺す気やろ♥
ええよッ！このままハメてハメて
うちのこと、おっちゃんのザーメン袋に
してくれてッええよッ♥♥
胃も腸も破裂するくらい、ザーメン
ごちそうしてええええ♥♥」

「……はあああ❤❤❤
尻から入れられたザーメン多すぎやで
上がってくる息までザーメンくさいの
わかるわあ。臍から下、全然感覚無いわあ……
ほんま、うちのコトおっちゃん専用の
ザーメン袋にしてくれたんやね❤
うち、めっちゃうれしいわあ❤」

マ○コからもアナルからも俺の
ザーメンを盛大に漏らしながら
満面の笑みを浮かべて俺に話しかけてくる
彼女は、心の底から満足げに見える。
まあ、チート能力全開でイカせ
まくったわけだから、そりゃ
気持ちいいだろうけど、今回は
ハメたこちらも超がつくほど
大満足だ。当たりクジも当たりクジ
年末ジャンボ宝くじに当たった
くらいの気分だ。

「なあなあ、おっちゃん！LINE
交換せえへん？うち、ヒマな時あったら
おっちゃんにハメまくってほしいわあ❤」

「あ～、俺」　NEやってないね」

「そうなん？やったら、ケータイと
メルアド交換しよか❤あ、そういや
今回うち、おっちゃんのチンポしゃぶって
ないやん！次の時にはたっぷりザーメン
飲ませてな❤うち、おっちゃん専用の
ザーメン袋やもんな❤」